
フォーカード？ いや、革命だ！

妖

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

フォーカード？ いや、革命だ！

【Zコード】

Z2014Y

【作者名】

妖

【あらすじ】

人間界、魔界、天界……この三界で成り立つ世界

この物語は魔界の家庭教師？が引っかき回したり、引っかき回されたりするお話です

これは更新したとしても順調に行けるかどうかわからぬ大分チャレンジ要素の多い作品となつております

そんなんですが時間があるときにも、ちょっとのぞいていただけたら嬉しいです

オープニング

豪華な調度品、大きなベッド、どこか禍々しい雰囲気。

モウ、ここは魔界。

そんな物騒な場所で話は始まる。

「ああ・・・・・つまんねえなあ」

しゃしゃ！

お前ホケの家庭教師だぞ！？

「…………なあハリー・ゼル、なんかおもしれえことないか?」

「ボクの話聞いてた!?」

「よつくら行つてみるか！」

我が道を行くマイペースな男を止めよ!とするフードを被った男の子。

彼らは一体何者なのだろうか・・・・・それはまだ謎に包まれている。

少年が腰の辺りに飛びつくと、男は立ち止まり振り向く。

「わかつてゐるつて……（お前のオヤジにも頼まれてるしな）

「ホントか！？」

つていうか父上も、なんでお前みたいな不真面目なやつを家庭教師につけたんだ？」

「そりゃあ、俺が優秀だからだろ?」

「はいはい・・・・・でお前父上と何処で知り合つたんだ?」「言ひこねえがまあいいさ。」

ハゴスと出会った場所か？

あゝ・・・・・何處だつたかねえ」

だから父上の名前を呼び捨てにするな!!

小説世界編集部

卷之三

ああ そう だつ たな 小指 一本 ねえ

男は少年に見えないよう小さく笑う。

その顔はまさに獣猛な野獸の様な笑みだった。

八月三十日

みを浮かべる。

「 そう言えばお前はボクよりも長生きしてんだから、 一いつ般の つであるんじゃ ないのか？」

Γ Ι Ι Ι Ι Ι Ι Ι Ι

「またボクをバカにして……ハア」

「お前はまだまだ子供さ、だがまあ・・・・・今日の模擬戦で良

「ホントか！？」

「ああ、本当に

悪魔はウソはついても、約束は破らないもんだ

「絶対だからな！」

そう言い残すとHミーゼルは部屋から走つて出て行った。
その後ろ姿を苦笑しながら見送る男。

「まつたく・・・・・・ハゴスには微塵も似てねえなあ」
「余計なお世話だ」

「うお！？」

いきなり後ろに出てくんなど！」

「フン、お前が隙だらけなのが悪いのだらう？」

「真後に転移されて気付つてのは、なかなか無茶言つてくれるぜ」

男の後ろに音もなく現れたのは、Hミーゼルの父で魔界の大統領ハゴス。

その本当の姿を見た者は魂すら残さず消滅するとまで言われている
男だ。

そんな人物に家庭教師の男は親しげに話しかける。

お前にはな（」

「わかつてゐるとは思うが、来年までだぞ？

そう言つて約束だからな・・・・・・

「ああ、それで借しは帳消しだ。

頼むぞ、アグニス」

そう言い残すとハゴスは転移の術式で執務室へと移動した。残された男は小さくため息をつく。

「ここではアグニツ呼べよな、何のための偽名だつづうの。それにしても、はあ・・・・・つまんねえなあ。とりあえずあの餓鬼ほつといたらうつせえし、様子でも見に行くかね！」

男はポケットに手を突つ込み部屋を出て行つた。

今は昔、人は闇を恐れていた。

闇を恐れ生きることで人は慎ましく生きることができていたのだ。しかし・・・・・人間の科学力が進化することで、徐々に闇を恐れることがなくなつてきてしまった。

これはそんな人間たちを戒めるものたちの物語である・・・・・かもしだれない。

「くつそオ～、あの時アグーが声をかけてこなければ勝てたの...」
「そんな簡単に注意を逸らすお前が悪いんだろ？」

話しながら廊下を歩いているのは、所々に小さな傷を負ったエミー
ゼルどっこか楽しそうなアグーである。
どうやら訓練は惜しこうで失敗したようだ。

「どうわけでお前の質問には答えないからな

「少しごらーい、いいじゃ ないか！」

「約束は約束だからな」

「ちえっ」

不満はあるが、これまで短くない時間を共に過ごしてきて彼が折れ
ないことを知つているエミー・ゼルは諦めることにした。

その子供っぽい反応に苦笑しながらアグーは軽く頭を撫でる。

「まあ、惜しいところまで行つたんだ。
次はイケるだろ？よ」

「・・・・・・当たり前だろー」

ボクは魔界大統領の父上を持つ死神、エミー・ゼルだぞー。」

「そうだな・・・・・・。

まあ俺はお前自身を評価してるんだがな

「同じ意味じゃないのか？」

「いつかわかるさ……（いつこのは自分で気付くもんだ
しな）」

不思議そつに首を傾げる少年の頭をさつきよりも強めに撫でると、突然立ち止まつた。

そしてアグニは前方の柱を睨みつける。

「オイ、そこにいるヤツ出てこい」

「…………貴様に気付かれるとはな」

そつと柱の陰から現れたのはハゴスの側近兼秘書をしている魔界三豪傑の一角、雷帝サイロスだつた。

その顔はどこかアグニを侮蔑している様だ。
しかしそんなことを微塵も気にせず、気配を殺して待つていた理由を尋ねる。

「お褒めにあずかり、恐悦至極…………で、なんの用だ？」

「チツ、生意氣な。

貴様の様な何処の馬の骨とも知れぬ輩に、子息を預けるとは、あの方は何を考えておるのだ？」

エミーゼルを見て、ため息をつくサイロス。

その溜息にエミーゼルは下を向き、小さく肩を震わせる。

アグニはそれを見て小さく舌打ちすると、少しだけ前に出てサイロ

スの視線を遮つた。

するとサイロスは視線をアグニの顔に移し、鼻で笑う。

「用があるなら、早く言え。

俺は早く部屋に戻りたいんだよ」

「ああ、そうだったな。

・・・・・大統領閣下がお呼びだ。

直ちに執務室へと来るよう」

「わかった・・・・・それだけか？」

「本当に生意気なやつめ・・・・・あんまり調子に乗らないことだ。

お前なんぞ、私にかかれば一瞬で消し炭に出来るのだからな

「はいはい、わかったわかった。

魔界三豪傑様は忙しいんじゃないのか？

俺なんかに構つてないでさつさと行つたらどうだ

「チツ！」

自分の脅しに微塵も恐怖を感じていないアグニに苛立ちを感じつゝも、サイロスはその場を去つていった。

消えてからもしばらくサイロスの去つていった方向を見ていたアグニだったが、ふと自分の服の裾を掴んで震えている存在に気付く。

「・・・・・どうした？」

「なんでアグニはサイロスが怖くないんだ？」

「いや、サイロスだけじゃない。

お前が戦つてゐるところはあんまり見たこと無いけど、強さは精々中級悪魔くらいだろ？」

なんで自分よりも強い相手にあんな風に接することが出来るんだ？

「なんでって言われてもなあ・・・・・・なんとなくだな」

「なんとなく！？」

「まああえて言うなら、俺はハゴスに頼まれて来てるわけだから、ハゴスの部下であるアイツらは手を出してこないだろうからな」

「それでも、もし隠れて手を出して来たらどうするんだよ！・

お前死んじゃうんだぞ！・」

「そん時はそん時つてこ「そんなの嫌だ！」・・・・・大丈夫だつて、俺はお前が思つてるほど弱くないんだぜ？」

顔を歪め、目に涙を溜めて叫ぶエリーゼルに少し驚いたアグニーだったが、その場にしゃがみ込んでエリーゼルに田線を合わせる。

「それに俺だつて死ぬ気は無い。

目的もあるしな・・・・・だからあんまり心配するな

「し、心配なんてしてない！！

た、ただお前がいなくなつたら家庭教師が居なくなつて困るから・・

・・・・

「ああ、わかつてるつて」

田元を袖で拭いながらさつぽを向くエリーゼルを苦笑しながら見つめる。

そしてスッと立ち上がりエリーゼルに背を向けた。

「もう大丈夫だな・・・・・・さてつと、じゃあ行くとするかね」

「何処に行くんだ？」

「どうやらハーネスが俺に用があるみたいだからな」「あ

「あ

「忘れてたのか・・・・・まあいいけどな。

お前は部屋に戻つて、今日の訓練の反省点を纏めとべりがつ。

特に最後の魔法の撃ち合つことな

「わかった

「よし、じゃあな

アグニはエミーゼルに背を向け、廊下の曲がり角へと消えていった。その背中に向けて小さく呟いた「ありがとう」という言葉はアグニに届くことはなかったが、その気持ちは伝わっていたことだらう。

第1話（前書き）

一人お気に入り登録していただいたので、二話目も上げます

第1話

執務室の前に着いたアグニは、ノックもせずにいきなりドアを開ける。

すると中には豪華なイスに座つた魔界大統領ハ、ゴスの姿があつた。

「来たぞハ、ゴス、何の用なんだ？」

「・・・・・・ノックぐらいしろ。

もし我以外に誰か居たらどうするつもりだ」

「お前以外の気配感じなかつたし、実際居なかつたんだからいいだろ？」

「はあ・・・・・・もういい」

ため息をつき、首を小さく横に振るハ、ゴスだったが、やはりアグニはまったく気にしてない。

それどころか何故か胸を張つている位である。

気にしていたら話が進まないと思つたハ、ゴスは、早速用件の説明に入ることにした。

「お前を呼んだのは他でもない・・・・・地獄を知つてゐるな？」

「ああ、そりやあな」

「では地獄に『暴君』が居ることはどうだ？」

「一応は知つてゐる。」

「そりいえばアイツ地獄でなにやつてんだ？」

アグニの質問にハゴスは顔を顰める。

何故そんな顔をするのかわからない彼は首を傾げるが、ハゴスの次の言葉にその顔は驚愕に染まる。

ちなみにここで言つ『暴君』は、ある悪魔の一いつ名である。

「・・・・・・・係だ」

「何だつて？」

「プリニー 教育係だ」

「ふーん・・・・・・・って、はあ！？」

ここにデイスガイアを知らない人に説明をしておくと、プリニーとは生前に罪を犯した人間の魂をペンギンのぬいぐるみのような物に詰め、その罪を誰かに呻くことで償つといつ存在である。投げられると爆発することから、爆弾の様に使用される場合もあるので非常に過酷な償いと言えなくもない。

追記するとプリニーには心得が存在し、一番最初の心得は語尾に「ツス」を付けると言つものである。

「なんでもまたそんな仕事してんだ？」

「理由は知らんが、魔力を失つてることと関係があるのでないか？」

「アソツまだ血吸つてないのか！？」

「何百年経つたと思ってんだよ・・・・・・・

「あやつの約束に対するこだわりは、凄まじい」

二人は昔の暴君を思い起こし、懐かしだ。

決して心温まる思い出など無いが全力で戦っていたときは、まるで恋人との逢瀬のように心躍つたものである。しかしアグニは「」に昔の知り合いの話をしに来たわけではない。

「で、アイツがどうしたんだ？」

「結論から言つと、地獄で暴れ始めたよつだ」

「ほう！ そりやあ面白い事になつてゐるな！－」

「面白がつてゐる場合ではないぞ」

「俺にはあんま関係ねえしなあ」

「いや、関係はある」

「は？」

アグニは現大統領府に隸属しているわけではない。故に暴君が政府転覆を企もうがあまり関係ないのだが、ハゴスが言うにはどうやら関係があるようだ。

その理由を聞くために耳を澄ますアグニ。

「先ほど反逆を止めようと地獄へ刺客を放つたのだが、撃退された

ようなのだ」

「腐つても『暴君』だな。

吸血鬼の頂点は伊達じやないってことか

「茶化すな。

・・・・・そこで援軍を送る」とこしたのだ

「誰を送るんだ？」

その言葉を受けて、ハゴスの表情が歪む。

まるで自分の身が切られる苦痛を感じているよ！」

「なんだよ？」

「アバandonだ」

「特殺任務部隊か・・・・・って、おい！」

あの部隊のトップは！？」

「そうだ、我が息子・・・・・エミー・ゼルだ」

特殺任務部隊『アバandon』とは、その昔魔界が荒れていたときに猛威を示した部隊である。だが現在は名前は物騒だが今まで実戦経験も殆どなかつたお飾り部隊であり、構成メンバーも若く余り力のない悪魔で構成されている。

そんな部隊の隊長を、何故大統領の息子が務めているのかは・・・・・いづれ語るときが来るだろ！

「アイツをまだ実戦に出すのは早いぞ！」

その任務は魂を狩つたことのない死神にとつて、荷が重すぎるだろうが！」

「それは分かつてゐるつもりだ。

しかし反逆者の処理は特殺任務部隊の仕事だ」

「・・・・・どうしても行かせるのか？

下手するとあの餓鬼死ぬぞ」

「大統領として特例扱いは出来ん」

組織のトップは常に冷静且つ客観的な視点を持たなければならぬ。例えそれが自分の息子の危機に繋がろうとも・・・・・。

「話は分かった。

だが俺を呼んだ理由が分からねえ。

お前は俺に何をさせたいんだ？」

そう聞くとハゴスはイスから立ち上がりアグニに向かって歩き始め、アグニのおおよそ2メートル手前で立ち止まつた。

その目には強い意志が宿つている。

「頼む・・・・・息子に付いてやつてくれ。

自由に動けるのは貴様だけなのだ。

部下を使えば公私混同と言われ、内部で反乱が起こるかも知れん」

「・・・・・・・・・

「貴様は今の魔界の現状を知っているだらう。

地獄では現政府に不満を持つている者も多い。

・・・・・それに『彼奴』のこともある。

だから頼む」

そう言って深々と頭を下げる姿は、魔界大統領ハゴスではなく、一人の父親の姿だった。

アグニはその姿を見て、一端何かを考えるよつに目を開けた。

そしてゆつくりと目を開けた。

「俺もアイツほどじゃないが、交わした約束は守る。

俺がお前と交わした約束は、過去の借りを帳消しにする代わりに息

子の面倒を見る」と。

「……………ミニーゼルの近くに居ないと面倒を見れないだろ？」

「……………すまんなアグニス」

「……………俺は約束を守るだけだ」

こうしてアグニの地獄行きが決まった。

ちなみにアグニは地獄へ行つたことがなく、地獄に何があるのかと顔には出さないが若干楽しみにしている。

地獄のことを考えていると、ふと一つの疑問が思い浮かぶ。

「そういえばアイツは、なんで反逆始めたんだ？」

「今プリニーの数が増えすぎているのは知っているな？」

「まあ一応な」

「故にプリニーを出荷せずにある程度処分する事にしたのだが、その処分するプリニーがアヤツの教育していたプリニーだつたらしいのだ。

アヤツはそのプリニーどもに、出荷する前にイワシを馳走する約束をしていたらしい。

「その約束を守るためだと聞いていい」

「……………変わらないなあアイツ」

「そうだな」

「だが何故イワシなんだ？」

「……………知らん」

これから戦うかも知れない相手のことを思い出しながら、何故か少し和んだ二人だった。

果たして地獄には何が待ち構えているのか？

そして『暴君』とは一体どんな悪魔なのか?
全ては地獄で明らかになる。

第1話（後書き）

Hミーゼルマジ天使 w

……まあ俺が一番育てたのは「デスコ」なわけだけども！

今なら結構安い値段で「ディスガイア4」は買えるので興味がある方は是非

ちなみに後日談やアpend「ディスク」の敵は結構レベルが高いので、もしやるかたはお気をつけを……レベル5000とかだよ？

いやまあ、後日談の最後に出てくる奴が一番鬼畜なわけだけども一度した攻撃はダメージゼロで、こつちは相手の攻撃食らえればほぼ

確実に死ぬという中々の鬼畜っぷり

装備整えて、装備品のレベル上げて、一気に落とすのが常套手段

第2話（前書き）

そろそろ資格試験の勉強を本格的にしなきゃならないな……趣味は
しばらくお預けかな？

執務室を後にしたアグーは、地獄に行く」とを伝えるためにHミーゼルの部屋へと向かう。

長い廊下を歩いて部屋の前に着きドアを開けると、アグーに言われたとおりに机で今日の訓練の反省を書き出しているHミーゼルの姿があつた。

「おお、やつてんな。
真面目だねえ」

「つよい！ お前がやれつて言つたんだりー。」

振り返つて怒鳴つてくるHミーゼルだったが、アグーは微塵も気にしていないうだ。

むしろその反応を楽しんでいるかの如く笑顔である。

アグニは笑顔のまま机の上にあつた反省点の書かれたレポートを取り、読み流す。

レポートには最後の相手を倒したと思って氣を抜いていたら、生き残つていた相手に不意を突かれて負けたと書いてある。

まだまだ精神的な粗が目立つ内容だったので、若干眉をひそめたアグニだつたが直ぐに表情を元に戻しレポートを机の上に戻す。

「そつだつたか？」

・・・・・まあいいじゃねえか。

そんなことよりハゴスから伝言があるぞ？」

「父上から？」

エミーゼルとハゴスは最近直接会つことも殆どなく、そんな父親から突如伝言があると言われ疑問を感じたようだ（ちなみに言つておくと別に家族仲が悪いわけではなく、ただハゴスが忙し過ぎるだけである）。

アグニは地獄で反逆が起つたことと、その鎮圧にエミーゼル率いる特殺任務部隊アバドンの出動が決まったことを話した。すると顔を青くしたエミーゼルがアグニに問いかける。

「ボ、ボクが！？」

「そう、お前がだ。

何か問題でもあるのか？」

「え、でも、だつて・・・・・・」

「まあ決定事項らしいから断れないみたいだぞ？」

「そんな・・・・・だつてボクは・・・・・・」

まるでこの世の終わりのような顔を浮かべるエミーゼルに苦笑するアグニ。

無理もない。

地獄にいるのは弱体化されているとは言え、魔界有数の極悪人達。まだまだ経験不足のエミーゼルが怖がるのもしょうがない。とりあえずこのままではまともに会話も出来ないので、まずは落ち着かせることにした。

「まああんま怖がんな。

一応俺もついて行つてやるからよ

「ほ、ホントか！？」

「うお！？ 本当にから落ち着け！」

俯いていたエミーゼルはバツと顔を上げ、アグニに掴みかかる。流石に掴みかかってくるとは思わなかつたアグニは、一瞬はじき飛ばそうとする自身を無理矢理押さえ込んだ。

ここで否定的な行動を取ると、またエミーゼルはネガティブモードに入つてしまつたために、正直結構心拍数が上がつたアグニだつた。だが一つだけ忠告するために、アグニは顔を引き締める。

「ただし俺は極力戦闘に参加しないぞ？」

「俺が狙われたら話は別だが」

「え？ なんで？」

「俺はアバドン所属じゃないしな。

もし俺が戦闘に参加したら、出しゃばるなつて言われちまうだろ？」

「…………そつか、そうだったな」

少しだけガッカリしたようだが、最初に比べればマシな精神状況になつたようだ。

知らない場所に一人で行くのは結構不安も大きいから、知り合いが一人でも多い方が気が楽なのだろう。

アバドンのメンバーは完全に上司と部下の関係な上、エミーゼルに従つている理由が魔界大統領の命令だからという理由なので、完全なビジネスライクな関係故に数には入れない。

エミーゼルは自身の頬を叩き、気合いを入れる。

「よしつ！」

待つていろお、地獄の反逆者どもめ！

大統領の一人息子、死神エミーゼルが鎮圧してやるぞ……。」

「その調子だ！」

気持ちで負けてたら何もできねえからな（まあ今回はちょっと相手が悪いかも知れねえが、最悪コイツ連れて逃げりやいいだけだしな）

「

アグニは最悪エミーゼルだけ生きていれば問題ないので、アバandonが全滅しようと気にしない。

下手に手を広げすぎると、大事なものがこぼれ落ちてしまつかも知れないから・・・・・。

少し物思いにふけるアグニだったが、まだ任務開始日時を伝えていなかつたことを思い出す。

「出発は明日の朝だ。

しつかり準備しておけよ？」

「わかった！」

明日はよろしく頼むぞ！」

覚悟が決まつたエミーゼルの瞳にはこの任務を必ずこなしてみせると、決意の炎が燃えさかつている。

尊敬する父から頼まれた任務。

今まで目立つた功績のないエミーゼルにとつて、張り切らない理由はなかつた。

ただ反逆しているのが誰か確認しなかつたことが、彼にどんな結果をもたらすかはまだ誰にも分からぬ。

そしてアグニは聞かれない限り教えるつもりは無い様である。コレも一つの教育と考えているのだろう。

「じゃあ、また明日な」

「うーん・・・・・・・・杖はアレで良いとして、ロープはどうしようかな？」

いや・・・・でも・・・・」

もう明日の任務の事を考えているのか、アグニの挨拶すら聞こえない位思考に没頭しているエミーゼル。

そんな余裕のないエミーゼルを見て肩を竦めるアグニだったが、ふと自分の過去を思い出し苦笑いを隠せなかつた。

誰かに褒められたい、誰かに認められたいという想いを抱いたことがないアグニにとって、エミーゼルの気持ちは余り理解出来ないものだったが、昔は自分よりも強い相手と戦うときによれくらい緊張してたなあと過去を振り返る。

そのまま部屋を出て自分の部屋へ向けて歩き始めるアグニ。

昔の事を思い出した彼は、ふと昔の仲間達に会いたいという気持ちが少しだけ湧いたようだ。

「明日もし加勢する事があるなら、久しぶりに誰か呼ぶか・・・・。

今のアッシュがどの程度の力を持っているかわからねえし、備えあれば向とやらつて言つしな

廊下で呟いたその言葉には、どこか楽しそうな気持ちが込められて

いた。

彼の特殊能力は仲間の召喚。

魔物使いの突然変異種たる彼しか持ち得ぬ能力である。

その呼び出す相手によつては、明日の地獄は文字通りの地獄になるかも知れない。

「そうと決まれば誰を呼ぶか考えておかないとな！」

誰を呼ぶか考えているその姿は、遠足を楽しみにしている子供の様に純粋に見えた。

例えその結果が激しい戦いになるのだとしても・・・・・。

第3話（前書き）

ゼロ魔……考え中

ディスガイア4……試行中

なんにせよ1-2月にやらなきゃいけない」とあるから、あんま身
が入つてない感じが……

魔界最下層の『地獄』と下級悪魔が住まう下層区の境目・・・・。そこにはエミー・ゼル率いる特殺任務部隊アバドンと、付き添いで来ているアグニの姿があつた。

眼下に広がる頑強な砦のような刑務所『地獄』は、エミーゼルに大きな緊張を与えていた。

「あ、アレが地獄…………」

「大丈夫ですかミー ゼル様？」

一だ、大丈夫に決まっているだろ！

不思議なことを語る。——

「ルービックキューブでした。

これは入らぬお世話を・・・・・

アバドンの副隊長でもある死告族に心配されつつも強がるエニーゼルだったが、足は震え顔色も良いとは言えない。

そんなリーダーの姿に不安を隠せない隊員達。

ちなみにその時アグーは、少し離れたところで欠伸をしていた。

「ふあああああ・・・・・・・・開つ」

「貴様もついてきたのなら気合いを入れろ」

「そうだ、そうだ！」

戦闘も碌にしない悪魔が暇そつにするなんて生意氣だぞ！」

「ああ、そいつあ失礼。

今後気を付ける・・・・・かもしだれないとわ」

ここでもアグニの扱いは余り良くないようだ。

その評価も当然なのかも知れない。

何故かというと、アグニは今の家庭教師という立場になつてから戦闘を行つたことが殆どなかつた。

それどころか殆ど大統領府内をうろちょろしていはるところか、昼寝しているところしか見られていなかつたのだ。

もちろん彼の部屋などのプライベートの部分は知られていないが、よく見られる姿がだらけていはるところなのでコネで入つてきた残念な悪魔という印象が強いのである。

ちなみに数少ない戦闘と言つのは、ヒミーゼルに強請られて軽く模擬戦をやつた位なのでアグニの正確な戦闘力を知つてはる者はここに存在しない。

「かの有名な『孤軍』に似た名を持ちながら・・・・・情けない！」

「ちよつとは前に出て戦つたらどうだ！」

「そうだ、そうだ！ 戦つてみろお！」

「いやいや、俺戦い苦手だし。

地獄の極悪人相手にしたら死ぬぞ？

（どうせコイツら戦つたら戦つたで文句言うんだろうなあ・・・・・・

・めんどくせえ）

「フン、腑抜けが！

もういい、各自進行用意だ！」

「――「了解！」「――」

完全にアグニを視界の外に追いやり、地獄へ向けて歩を進め始めたアバドンの面々。

しかしその所為でアグニの咳きを聞き取ることが出来なかつた。

『つていうか弱いもの虐めなんかしても面白くねえしな』という咳きを・・・・・。

そんな若干の衝突もありながら、ついに地獄へとたどり着いたアバドン+。

地獄の中は少し騒がしく、囚人たちはその口々に反逆者達について話している様だ。

エミーゼルは話を聞くために囚人たちの監獄へと近づいていく。

「オイ、反逆者について何か知つているか？」

「ア？ 何だこの餓鬼？」

餓鬼は家に帰つてクソして寝な

「な！？ オレ様を誰だと思っている！

オレ様は大統領の一人息子、死神エミーゼル様だぞ！」

「な、なんだと！？」

監獄内がにわかに騒がしくなる。

やはり大統領の息子という肩書きは大きな意味を持つようだ。

囚人たちは話し合いを始め、数分後に一体の悪魔が前に出てきた。どうやらこの囚人グループのリーダーのようだ。

「初めてまして坊ちゃん。

で、何をお聞きになりたいんで？」

「今地獄を騒がせている反逆者についての話を聞かせろ」「ふむ、わたくし達もそれほど多くの情報があるわけではあります
んが、お教えたしましょう」

どこか老成している猪人族の話を聞いてみると、どうやら反逆者は
プリニー 教育係の一人であり、地獄の獄長もその仲間らしいとのこ
と。

他にも幾つか情報はあつたが、その殆どが伝える際に歪んでしまつ
たであろう情報ばかり。

たとえば反逆者は身の丈10メートル以上だと、その強さは魔界
大統領に匹敵するなど様々だ。

この情報を真に受けたエミーゼルは動搖しながら、アグニへと視線
を向ける。

するとアグニが小さく首を横に振り、その情報は信じなくて良いと
伝えてくれた。

それを見て少しだけ気を取り戻したエミーゼル。

「もういい、雑談に戻つてくれて良いぞ」

「あの、坊ちゃん。

坊ちゃんは何をしに来たんですか？

やつぱり・・・・・

「多分想像している通りだ。

オレ様達は政府に仇なす反逆者の拘束、もしくは排除が目的だ！」

そつ自分で言つておきながら、排除といつ単語のところで若干顔が
歪んだ事に気付いた者はいないようだ・・・・・アグニ以外には。
アグニはそんなエミーゼルを見て、『やはり殺す覚悟はないか・・・

・・・面倒なことにならないと良いけどな』と心の中で思っていた。今回の任務に極力手を出さないと決めているアグニにとつて、この任務は若干面倒くさいアトラクション程度の印象しかないのだ。

「やつですか・・・・・ところで坊ちゃん。

情報を教えた報酬はないんですかね？」

「報酬？」

「流石に何もなしつてワケじゃなこですよな？」

そつだスのきいた声でHミーゼルに報酬を求める囚人。

その迫力に少し圧され、一步後ろに下がってしまったHミーゼルだったが、このままでは舐められると悪い、やけで踏みとどまつらがみ返す。

「いいだらう、父上に口利をついてお前達の刑期を少し縮めてやるつ。それでいいか？」

「そりやあ、ありがてえ！」

おい、聞いたか野郎ども！

この坊ちゃんが刑期短くしてくれるとこよ。

感謝しろよ！

「『あつがとつ』わこやす、坊ちゃん！」「

「せ、全員か？」

それはちょっと・・・・・・

「あ？ 何か仰いましたか坊ちゃん？」

「い、いや。なんでもない。

それじゃあ行くぞ！」

そつ言い残して足早にその場を去るヒーナゼル。

置いて行かれまいとしてアバドンも早足でその後を続ぐが、たった一人だけその場に残っていた。

その場に残ったアグニは再び雑談に戻ろうとする悪魔を一体呼び止める。

「なあ、そこのお前」

「あん？ なんだテメエ？」

坊ちゃんの部下かなんかか？」

「似たようなもんだ。

で、ちょっと聞きたいんだが、ここのはりーー教育係の名前って知つてるか？」

「名前？ ああ、確かヴァルなんとかつてやつだつたと思ひぜ？」

「もう一人の名前も分かるか？」

「そつちはフエンなんとかつてやつだ。

なんでそんなこと聞くんだ？」

「いや、有名な悪魔だつたら戦つときには気を付けなきやならねえからな」

「ブリニー教育係になるようなヤツが強い悪魔なワケないだろ？」

「心配しすぎだと思うぜ？」

「そうかもしだねえな。

じゃあ情報サンキュー、有意義な地獄ライフを過ごしててくれ

「余計なお世話だ！」

そつしてアグニもようやくヒーナゼル達の後を追い始めた。ヒーナゼルの後を追つている最中アグニは情報をまとめた。

「（ハゴスから聞いてはいたが、本当にヴァルバトーゼの野郎、プリニー教育係なんかやつてたのかよ・・・・・。それにもう一人のプリニー教育係はフェンリッヒか？何でヴァルバトーゼとフェンリッヒが連んでいんのか知らねえけど・・・・・コレはあの餓鬼にとつて厳しすぎるな）・・・・・どうすつかなあ」

悪化した現状をどうするか思考するアグニ。

暴君ヴァルバトーゼとその従者フェンリッヒを相手にするには戦力が足りなすぎる。

自分が加わればいい勝負が出来るだろ？が、別に敵対する理由もない（戦うこと自体に余り抵抗はないが、全力を出せない相手と戦うのは面白くないと思つてゐるため、あまりやる気が無いのである）。とりあえず会つてから考えることに決め、いい加減追いつかないと不味いと思い、足を速めていった。

第3話（後書き）

エクストリームバーサス楽しみだなあ

……頑張つて師匠を使いこなせるようにならないとな！

第4話（前書き）

いやつふ

もう読み専に戾ひつか迷うくらいに集中力が無くなつてゐるぜい
まあそんなこと言いつつもなんか書くと思いますがw

少し遅れたアグニが合流する頃には、既に反逆者達との舌戦が始まっていた。

昔聞いた声よりも若干幼い気がするが、過去に暴を競い合つた一人の悪魔を思い起させる声だ。

どうやらエミーゼルは暴君に子供を相手する気は無いと一蹴されたようだ。

「さっきの囚人もそうだったが、お前もか！
オレ様を誰だと思っている！

魔界大統領の一人息子、死神エミーゼルだぞ！」

「それがどうし「な、何だつて～～～～～！大統領閣下の一人息子様であらせられるとは～～～～～！」た

「そうとは知らず無礼な態度を取つてしまい、マジですいませんでした～～～～～！」

コイツの言うことなんか微塵も聞かなくともいいんで、オレ様の話を聞いてくだ「良い度胸だな、貴様・・・・・・ヴァル様の話を遮るとは・・・・・・イヤ――――――助けてエミーゼル様ああ

！！！」

なんかコントみたいなものが始まっているのだが、一步離れた位置で冷静に現状を把握し始めるアグニ。

先ほどからうるさく騒いでいる派手な真っ白い衣装を着ているのは、

おそらく地獄の獄長だろ？

ヴァルバトーゼのことは知っているし、フェンリッヒが人狼であることも知っている。

しかし騒いでるヤツには見覚えが無かったことからアグニは、そう認識した。

突然始まった漫才にキヨトンとしていたエミーゼルだが、未だ騒ぐ二人を視界から外し、先ほどヴァル様と呼ばれていた男に話しかける。

「何故お前はオレ様に平伏しない？

お前は大統領が怖くないのか！？」

「俺が恐れる？

何故そんなことをしなければならんのだ。俺には貴様を恐れる理由など無い」

「分からぬのか！？」

オレ様の親は魔界大統領なんだぞ！」

「貴様の親が誰だろうが、貴様自身を恐れる理由にはならん！それに俺が恐れるのはただ一つ。

イワシの小骨と、約束を破ることだけだ！！

大統領など知るかあ！！」

そう言つて胸を張るヴァルバトーゼに気圧されるエミーゼル。

いつの間にか戻ってきたフェンリッヒも追撃を加える。

「閣下が大統領ごとき恐れるものか！ 我が主を舐めるなよ！」

「なんなんだよお前ら！？」

「クソッ！ お前達と話しても埒があかない。」

何にしてもお前達は反逆者なんだ！
力尽くでも従つてもうつさ！

お前達！ 行け！！

ヒミーゼルの号令をきつかけにアバトン第一分隊が突撃し、激しい戦闘の幕が開ける。
しかし戦闘経験の差か、序盤からアバトンは劣勢だった。
腕が、脚が、首が空に舞う。

「うぎやああああ！ お、俺の腕があああ！」
「駄目だあ、勝てねえ！」
「俺はこんなとこで死にたくねえ！」

ヒミーゼルはドンドンと減つていいくアバトンの構成員に動搖している。

それに反して淡々と屠つしていくヴァルバトーゼとフュンリッヒの反逆者コンビを見て、アグニはそろそろ動いた方が良いかもしれないと自分の装備を確認し始めた。

最後の一人が倒れたとき、愛用武器の仕込み杖を片手にいつでも飛び出せる様にするために。

そしてついに最後の一人が地に伏した。

「お、オイ！

もつとしつかりしろよ..」

「小僧・・・・・お前は来ないのか？

お前も一端の悪魔ならば覚悟を見せてみる..」

「く、言われなくても、お前達なんかオレ様一人で充「はい、そこまでえ」アグニ！」

「引くのも勇気つてもんだぜ？」

「今は様子見つて事でいいじゃねえか」

「でも！」

「まあまあ、とりあえずお前は門のところに残してきた本隊を呼んできな。

流石に一対一は辛いだろ？」

「お前はどうするんだよ！」

「戦わないんじゃ無かつたのかよ！？」

「戦わないさ、ちょっと時間稼ぎするだけだ。

いいから行きな」

「・・・・・急いで戻つてくるからな！」

死ぬなよ！」

そう言い残して走り去るHミーゼルを見送り、アグニはヴァルバト一ゼ達と対峙する。

今ここに立つているのは三人だけ。

「つたく死亡」フラグつぽいからヤメロつてんだよ・・・・・なあ、
暴君さんよお」

「・・・・・アグニスか」

「久しぶりだな、そっちの人狼君ははじめましてだな」

「・・・・・ヴァル様、知り合いですか？」

それに先ほどアグニスと呼んでいましたが、小僧にはアグニと・・・

・・・

「小僧がなぜアグニと呼んでいたかは知らんが、コイツはアグニスだ。

お前も『孤軍』の話は聞いたことがあるだろ？

「『孤軍』…………召喚師アグニスですか？」

しばらく噂を聞かないと思つたらこんなところで何を…………

「俺もやりたくてやつてるわけじゃねえよ。

後アグニは今の名前だ。

今は大統領府にいるからな…………あんまり立ちたくないんだよ。

弱いヤツに集られるのは好きじゃねえしな。

で話は変わるが暴君よお、俺は別にお前と事を構える気ないんだわ

「何？」

「今は訳あつてさつきの餓鬼の子守してるんだが、別に俺はお前を討伐しろって言われてるわけじゃねえ。

それに俺が人の命令聞くようなタイプじゃねえのは知つてんだろう？」

「…………目的はなんだ」

「目的？ ああ…………うん、あの餓鬼を殺させないことがね？」

「分かった。あの小僧の命は保証しみつ

「ヴァル様！？」

「そりや、助かる。

んじや俺はあんま手出さねえわ。

一応周りのレベルに合わせて動くが、自衛に關してはちょい強めに行くからな？。

さてと…………それなり合流したかねえ。

じゃ俺はこいら邊で。

あ、一応礼として教えとくわ。本隊はさつきの奴らよりは強いだろうが、お前達程じやねえから気楽にやつてくれ。

今度こそ、じやあな！」

アグニはそのままどこかに転移していった。

消え去つた男の立つていたところを見ているヴァルバトーゼに従者フェンリッヒが囁みつく。

「何故何もせずに逃がしたのですか！？」

「彼ら『孤軍』とはいえ閣下にかかれれば・・・・」

「そうかもしかんな・・・・だがヤツの真価は召喚能力にある。もしここでヤツの切り札の一つを使われば、かなり厳しい戦いを強いられるだろう」

「ヤツの切り札・・・・ですか？」

「フェンリッヒよ、命奪の森を知つていいか？」

「ええ、触れた者の命を奪う巨大な粘泥族の突然変異種がいるという・・・・まさか」

「ヤツの切り札の一つはそれだ。

俺達だけならば何とかなるだろうが、プリニービもはそっぽいかない。

故にもしヤツと事を構えるならば、地獄の外でやらねばならんのだ

「そうですか・・・・全ては我が主の為に」

それぞれが自分の目的の為に突き進む。

少年は父のために、暴君は約束のために、従者は主人のために、そして過去の名を捨てた男は・・・・一体何を思うのか？

第5話（前書き）

エクストリームバーサス発売まであと少し
士補試験まであと少し……onz

第5話

予想外の相手との遭遇をしたヴァルバトーゼ達は、本来の目的である処分される予定のプリニーを解放するために歩を進める。しばらく歩くと彼らの町に、先ほどよりも多くの悪魔を連れたHミーゼルが立ちふさがっているのが見えた。

「反逆者ども！ ここでキサマラの反逆もお終いだ！！

今頭を下げて謝れば、捕まえるだけにしてやる！

抵抗するならオレ様由らお前達に鉄槌を下すことになる・・・・。
どうだ！？

降参するなら今の内だぞ！？

「ぐどい！

俺はただ約束を守りたいだけだ！！

早くそこをどけ！！

「ぐう・・・・・・（やつぱりこいつなるのかあ）。

いいだろつー ならば力尽くで連行するぞ！」

「ちょっと待て〜〜〜〜、オレ様は反逆者じやないぞー。
お坊ちやま〜〜、どうかお許しを〜〜！」

そう言いながらHミーゼルに駆け寄つていく獄長だったが、その後ろで何か企んでいる様な笑いをする者が一人・・・・・。 フェンリッヒは大きく息を吸い込んだ。

「おお！ 流石はアクターレ獄長！

敵のリーダーである死神エミーゼルの首を取るために特攻して行つ

たぞ！

しかも相手を油断させる演技まで・・・・・やはり獄長は勇敢だ

「んな！？」

この言葉を聞いて戦闘態勢に移行するアバドンの面々。一気に場の空気は緊張していく。

そんな中ドウのフンリッヒは、さらに追撃を加える。

「プリーのためにそこまで身体を張るだなんて、わたくしフエン
リッヒ、涙で前が見えません！！」
「そうだつたのかアクターレ・・・・・スマン、俺は貴様を疑つ
てしまつていたようだ。

お前の勇気しかと受け取つた！思ふ存分暴を示すがいい！」
「ええ！？ ウソだつたの！？
つていうか「イツボクを殺すつもりなの！？」

アクターは弁解の機会を『えりあれず、ドンドン窮地に立たされていく。

「ち、違うんです！」

れな・・・・・いやああああああああああああああああ

「一九四八年九月二日——」

首を狙われていると思った三一セルは自分の武器である、杖を頭上高く掲げてアクターへと向ける。

次の瞬間、振り下ろされた杖はアクターをとらえた。バコッといつ音と共に頭部に当たった杖。

「ア・・・・・アクターレエエ—————！」

ヴァルバトーゼの悲痛な声が響き渡る。
ゆっくりと倒れていくアクターレ…………。

「貴様……よくも同士を……！」

ボケの武器にて・・・・・

貴様の奥姿は決して忘れない
安らかに眠れ。 お前は空で見ているがいい。

俺が貴様に変わり、プリニー共を解放してやるとこひをーー」

エーラーは疑問の答えを得ることなく、新たな疑問にぶつかる。

「ブリーチだつて！？」

お前、プリーーのために反逆してるのか！？

「それは違うぞ小僧！」

俺はプリニーのために戦うのではない。
プリニーとこの約束のために戦うのだ！

！」

「バカじゃないのか！？」

そんなもののために命をかけるなんて！」

「俺には俺の譲れないものがある！」

この戦いはそのためのものだ！！」

ヴァルバトーゼは、そう言つて斬りかかつてくる。

その一太刀はアバドン副隊長の手によつて止められたが、それが開戦の狼煙となつた。

「H!!」ゼル様は援護をお願いします」

「う、うん！」

「反逆者ども！ H!!ゼル様を倒したいのならばまずは私を倒してみるがいい！」

「ほう、貴様・・・・・・名は？」

「反逆者どもに名乗る名などないわ！」

死告族の副隊長はその手に持つ大鎌がヴァルバトーゼの剣を弾き、距離を取る。

どうやらフエンリッヒは周囲にいる大量の悪魔と戦つてゐるらしい。

「貴様・・・・・・テスカトリポカか。

少しは骨がありそうだな」

「ほう、馬鹿ではないようだ・・・・・・しかし実力の方はどうかな！？」

「クッ！」

テスカトリポカとは死告族のランクの一つであり、中級悪魔クラスの力が無ければなれないものである。

その副隊長による、まるで嵐のような乱撃に防戦を強いられる。どうやらHミーゼルは呪文を唱えている途中のようだ。

「副隊長！ ちょっと離れてくれ！」

「喰らえ反逆者！」

「ウイング！ ！」

「クツ！ 伊達に隊長をやつていいわけではないよつだな！ だが、この程度オ！」

ヴァルバトーゼが気合いを入れ、大きく剣を振るとHミーゼルが放った風の塊は二つに裂け、その攻撃力を散らした。しかしそれを予想通りとばかりに副隊長は追撃を加える。

「おかわりだ、ウイング！」

「甘い！ 返すぞ！」

今度は切るのではなく、剣の腹で風の塊を打ち返す。流石にそれは予想出来なかつたのか、副隊長は避けきれずに直撃してしまつた。

「何ッ！ ガアッ！？」

「副隊長！？」

「オマケをくれてやるわ。

カズイクル・ベイ！」

ヴァルバトーゼのマントの一部が「ウモリヘと変化し、副隊長の下へと高速で飛んでいく。

そしてコウモリは敵に近づくにつれて、その姿をまるで巨大な牙のように変化させる。

自身の放った渾身の風魔法が直撃した副隊長は身動きが取れず、その牙を見ていてことしかできなかつた。

出来上がつたのは串刺し刑に処されたオブジェが一つ。飛び散つた副隊長の血がエミーゼルの頬に跳ねる。

「うあ・・・・・・・」

「・・・・・・・・・（じうしたもののか・・・・・・・）」

「ヴァル様、そちらも戻りいたようですね」

「え、なんで！？」

あんなにイッパイいたんだぞ！？

「あんな雑魚が多くいたところで、何の問題もない」

「そんな・・・・・・・」

絶望に打ちひしがれるエミーゼル。

逆に反逆者コンビも困つていた。

アグニとの約束で少年の命を取ることは出来ない。

それ故にエミーゼルをどうすればいいのか迷つているようだ。

「とりあえずブリー共を解放するか」

「そうですね・・・・・」

「お、お前達がここでブリー共を助けても、処分命令はもう出しているんだぞ！？」

「ここで助けたって意味ないじゃないか！」

「お前達はコレで完全に政腐の敵として狙われる・・・・・それで
もいいのかー？」

フェンリッヒはその言葉を無視し、ブリー共の閉じ込められる檻の扉を開ける。

こうしてヴァルバトーゼはブリーを解放し、約束を果たすことが
出来たのだった、めでたしめでたし。

・・・・・・・まだまだ続くよ？

第5話（後書き）

まず一つ補足、ディスガイア4のシステムの一つに転生といつシステムがある。

この転生というのは種族やクラスの変更を可能とするもので、転生前のレベルなどによつて転生時の基本ステータスを上昇させることができるものである。

テスカトリポ力は死告族のクラスの一つで、チエルノボグ（初期クラス） デス（2クラス） テスカトリポ力（3クラス） …… 3クラス目であり、ここまでに必要なのはチエルノボグでレベル40まで上げ、デスでレベル90まで上げることでこのクラスへの転生条件が整つ

因みに固有キャラクターを除くキャラクターには第6クラスまであり、死告族の最終クラスはタナトスといい、ここまで行くには先ほどのことに続き、テスカトリポ力をレベル180まで上げ、その後のクラスで360まで上げ、その次のクラスで760までレベルを上げなければならない

ここまでやつてやつとレベル1のタナトスになることができる。
正直原作のラスボスは何もしなければ100レベル位だつたはずなので、ここまでしなくても苦戦はしないはず（相手のレベルを変更しなければの話だが）

やりこみ始めるとレベルより、武器重要じゃね？とか思つたりもするけど、レベル上げないと億ダメージなんて夢のまた夢なんだよ…
俺は一体分の最強武器手に入れた時点で気が抜けてしまつて他のゲームに手を出し始めてしまいましたがw

次にヴァルバトーゼが撃つたカズイクル・ベイは固有技の一つで、自身の体を巨大な牙へと変化させて相手にかみつく攻撃です。

原作では使い勝手のいい技ではなかつたので、あまり見る機会はなかつたです。

最後にディスガイア4の魔法は主にファイア系、クール系、ウインド系、スター系、ヒール系、ステータスアップ系、ステータスダウング系に分けられます

攻撃魔法に関しては メガ ギガ オメガ テラ の順に強くなります

テラ辺りになるとモーションも半端じやなく、もうFFの召喚獣みたいなノリの攻撃です
オメガはネタですがw

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2014y/>

フォーカード？ いや、革命だ！

2011年11月30日18時49分発行